

# 主観年齢推定における自己若年視要因の検討

## 関係流動性尺度を用いた社会心理的要因に関する考察

Examination of the factor of younger identity in estimation of subjective age

An investigation of the socio-psychological factor using relational mobility scale

北岡勇紀、片平建史、長田典子

Yuki KITAOKA, Kenji KATAHIRA, Noriko NAGATA

E-mail : nagata@kwansei.ac.jp

### 和文要旨

自己がイメージする自分の年齢を主観年齢と定義し研究を行ってきた。顔画像に対して自己を基準とした年齢判断を求める主観年齢推定課題により、様々な文化で自己若年視の傾向を確認している。自己若年視の規定要因として社会心理的要因の影響を検討する目的から、日本人の実験参加者を対象として主観年齢の推定課題と関係流動性尺度課題を同時に実施し、2つの課題で得られたデータの関係を調べた。関係流動性とは、機会コストの高さに応じて人々がよりよい相手を求めて新しい関係を形成する頻度を表し、個人の社会心理的傾向を規定する背景要因として、文化差を説明する有望な概念であるとされる。我々の先行研究では自己若年視の日米の文化差が明らかになっており、関係流動性は日本よりも米国で高いことが知られている。このことから自己若年視傾向と関係流動性の間に相関関係が見られるという仮説を立てた。結果より、自己若年視傾向と関係流動性尺度得点について仮説を支持する相関は男性の若年層のみで見出されたのみで、全体としては一貫した相関が見られなかった。これらの結果を受けて、関係流動性と自己若年視の相関関係に関して考察を行った。まとめの議論として、個人の社会心理的傾向をより直接的に測定する尺度を用いて、自己若年視との関係を検討する可能性について議論した。

キーワード：顔画像、主観年齢、実年齢、非線形回帰分析

Keywords : Facial images, Subjective age, Real age, Non-linear Regression Analysis

### 1. はじめに

対人場面において、人は相手の性別や年齢といった様々な属性を顔や声などの情報から推定する。中でも年齢は、相手との関係性を決定するための非常に重要な情報であるが、他者の年齢を実年齢より高く推定する傾向が多くの研究で指摘されてきた [1]。筆者らは、この他者老年視が自己の年齢を実年齢よりも若く知覚（自己若年視）しているために相対的に引き起こされた現象であると仮定し、主観的な自己の年齢イメージを測定するための主観年齢推定課題を用いて研究を行ってきた。

主観年齢推定課題では、評定者が呈示された他

者顔について、自分より年上か年下かという自己に関連付けた相対的な基準による年齢判断を行う。ここで得られた評定値と実年齢差の分布データの偏りから、「主観年齢」として定義される定量的な値が算出される。筆者らの研究の結果、主観年齢の若年方向への偏り、すなわち自己若年視傾向が年齢、性別、国籍を問わず普遍的に存在することが明らかとなっている [2]-[4]。このことから、自己若年視傾向の生起は年齢推定に関わる評定者の経験や学習、年齢に依存した顔画像の形態的特徴によるものではなく、評定者の内的な特性に基づくと推測される。そのような内的要因として、(1) 過去の自分の顔の記憶により、自己の